

## 編集部H編

### プロに行ける大学を求め九州へ

「素材で言えばプロに行かない。あとは本人の気持ちだな。」

常葉菊川・森下知幸監督が当時3年生の岩本喜照を評した時の歯がゆそうな表情は、3年たった今でもよく覚えている。1年夏に県大会準々決勝で完封を果たすなど鮮烈なデビューを飾り、その後も順調に成長。3年時には静岡を代表する投手となったとはいえ、1年夏のボールを見た者ならば、その頃の岩本に多少の物足りなさを抱いていただろう。私もその一人だった。

その3年夏は県準々決勝で敗退。甲子園出場は叶わず、福岡六大学リーグの九州共立大に進学した。そして昨秋、リーグのベストナインを獲得。地方の強豪チームで3年となった岩本は今どんな投手となり、どんな投球をしているのか。5月中旬、福岡に飛んだ。

今春、岩本は2戦目の先発として4勝1敗。リーグ優勝には届かなかったが、安定した投球を見せた。しかし、そもそもどうして九州の大学を選んだのか。常葉菊川から九州共立大に進学したのは岩本が初めてで、岩本自身、九州にルーツがあるわけでもない。

「プロに行ける大学に行きたかったの。練習に参加した時に、環境も良かったし、大瀬良大地さん（現広島）とか狭間正行さん（現Honda熊本）とかレベルの高い選手がいて印象が良かったですね」

「プロに行くために」。岩本の思いは強かった。毎年、プロや社会人に投手を送り出し、投手育成の名門ともいえる九州共立大を選んだのは岩本の決心でもあり、挑戦でもあった。

### 大瀬良が育ててくれた心と体

レベルの高さは覚悟していた岩本も、最初はとにかく部員の多さに驚いた。200人が住む寮で暮らし、上下関係の風通しは良かったが、監督から部員まで仲が良く自由な常葉菊川とはもちろん違う。リーグ戦の時期以外は朝練もあり、授業も受けなければいけないというめまぐるしい生活。

高校時代とは全く違う環境の中で必死に毎日を過ごしていた岩本を、気にかけてくれたのはドラフト上位候補として注目されていた3学年上のエース・大瀬良だった。同じ身長で、同じ

右腕。大瀬良も岩本に自分と重なる部分を見いだしたのかもしれない。

「1年生の時に大瀬良さんとつきっきりで練習もやらせてもらって、アドバイスをもらったり、こつちが聞けば何でも教えてくれた。食トレとか生活全般を見てもらいました」

食が細い岩本は1回の量を減らし、1日6食にするなど工夫して食事を増やした。食堂では隣に大瀬良が座り、食事を残さないよう見張っている。そして、高校時代から10キロほどの増量に成功した。大瀬良との思い出を語る岩本から笑みがこぼれる。

「食べ終わるまで部屋に帰してもらえなかったの、その食トレが一番大変でした。でも、大瀬良さんにここまでやってもらわなかったら、ここまで大きくはならなかったと思います」  
確かに驚くほど体はしっかりした。

ヒョロリと背が高かった高校時代に比べ、今は太ももが張った投手らしい体となった。大瀬良は岩本の体も育ててくれたが、岩本が大瀬良と出会って一番変わったのはその内面だった。

「高校時代は一人で野球をやってしまっている部分もありました。だけど、投手のマウンドでの姿を見て、野手も助けてやるうって気持ちになるって大瀬良さんに教えられて。1年生でもマウンドに立つ以上は、そういう気持ちを持たないといけないって」

大瀬良の言葉、エースとしてマウンドに上がる背中から、マウンドに立つ者として大切にしなければいけないことを学び取り、そこから岩本の行動も変わっていった。

「前は点を取られたらすぐに崩れたりすることもあったんですけど、経験を積んで、今はしっかり切り替えられるようになりました。そういう気持ちの部分で大学に入って一番成長できたと思います」

### 秋こそ全国デビューを!

心の成長に成績もついてくる。1年春から登板し、2年春からは2戦目の先発も任せられるようになった。そして昨秋は1戦目の先発として4勝0敗。ベストナインを獲得し、一気に福岡六大学リーグの注目投手となった。

「球速は今、最速で145キロぐらい。高校時代より下半身がしっかりした分、キレが良くなって角度もつけられるようになりました。あとは表示の部分で150キロを出したいですね。やっぱり上位で行くなら」  
大瀬良は1位でプロに行った。そし



高校時代は1年時から長身右腕として期待を集めたが、甲子園出場は叶わなかった

て高校1年秋、2年夏と投げ合った静岡・野村亮介（現中日）も社会人を経て昨秋、ドラフト1位指名を受けた。「周りの人たちが1位で行ったので、1位になるレベルとか基準がわかりました。どれくらいできれば1位で行けるのかって。自分は今のままじゃ足りないですけど、あと1年半あるので」「1位で行くために足りないものを具体的に尋ねると、「狙ってグッツーが取れる変化球」という答えが返ってきた。ワンランク上の投手になるために、意識している部分は数多い。

しかし、今の岩本の目標はチームとしての大願にあった。「秋はとにかく勝ちたい。全国に行くためにここに来たのもあるので。1回行けば、2回、3回行って行けると思うんです。その1回が難しいんですけど。秋は絶対に全国に行きます」

昨秋はリーグ優勝を果たしたものの、九州地区の代表決定戦で敗退し全国を逃した。今春もリーグ3位と優勝への道は遠い。岩本がその右腕で全国に導くとき、岩本自身もさらなる成長を遂げるに違いない。

『静岡高校野球』編集部が、今もつとも気になる人物に会いに行きます! 第1回は編集部Hが常葉菊川出身・岩本喜照(九州共立大)、栗山が東海大出身・弓長哲俊監督(リコー沼津)の元に向かいました。

## 岩本喜照 (九州共立大)

### 岩本喜照【いわもと・きしょう】

1995年3月3日生まれ、静岡県掛川市出身。188センチ80キロ、右投右打。中学時代は浜松南シニアで活躍し、進学した常葉菊川では1年夏からマウンドに立つ。高校3年夏はベスト8。九州共立大でも1年春から登板し、2年秋にベストナイン獲得。長身からキレのあるストレートを投げ下ろす本格派右腕。

# たい

